
東方神話大系

あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方神話大系

【Nコード】

N8484Y

【作者名】

あき

【あらすじ】

私は冴えない大学3回生。なのだがいつの間にかよく分からない世界に迷い込んでしまった。この世界は幻想郷と呼ばれているらしいのだが……

果たして私は私が居た世界へ戻れるのであろうか…

序章：ふぁーすところなくと

午前8時35分、私はいつものように電車へと乗り込む。

午前8時50分、私はいつものように電車を降りる。そしていつものように授業を受け、これまたいつものように帰路に着く……筈だった。

「おや？」

気がつくとは私は見知らぬ場所に居た。先程までの喧騒も無く、人ごみも無いとても静かな場所にポツリと立っていた。しかも不思議なことに辺りはすっかり暗くなっているではないか。これではここがどこだかも分からない。というか私はどうやってここへ来たのだろうか。私の不安など興味無いとも言わんばかりに辺りは静寂に満ちていた。

「とりあえずどこか落ちつける場所は無いものか」

ポツリと独り言を吐きながら歩き始める。どこへ行けばいいかも分からぬためここは自分の勘が頼みの綱だ。私は大学受験で大いに役立った私の先見の明を頼りに歩き始めた。見た限りここは山の下腹あたりであろうと予測された。然ればさらに下山すれば街があるだろうと私は推測した。そうと決まれば早速移動開始だ。こんな暗闇に独りでいるのはさすがに怖い。

歩きだして30分。私はぐるっと360度の角度から見ても迷っていた。

「これは参った」

独りで居る寂しさと不安からか私の独り言が冴えわたる。

「おーい。誰か居ないのかやーい」

呼びかけてみたものの返って来るのは耳一杯に広がる静寂の音のみ。私は20を過ぎて初めて寂しくて泣きそうになった。

「なにくそこんなことでへこたれている場合か」

自分で自分を励ましたのも久しぶりだった。

歩き始めてから1時間は経ったであろうか、私の目は暗闇にもだいぶ慣れ、僅かにこぼれる月明かりのみで周りの風景は見えるようになった。

「竹林……か」

辺りは先刻までとは変わっており私の周りにはおびただしい数の竹が生い茂っていた。気づかぬ間に竹林へと足を進めていたらしい。

「これは少し厄介だな」

誰に説明するでもなく私は呟いた。決して寂しい訳じゃ、ないよ。竹林はどこを見ても同じような竹ばかりが生えているから迷いやすいのだ。昔読んだ本に書いてあった。

カサ……

ふいに私の後ろで音がした。これだけの静けさの中でいきなり発せられたその音の方向へ私は素早く踵を返す。

「こんな夜更けに人間が何故こんな所にいるんだ？」

これが私が幻想郷へ入って初めてその世界の住人と関わった、ふあーすところなくとであった。

第一章：迷いの竹林で

私は人の声を聞いて安堵の息をついた。やっと人に会えた。こんなにも暗く静かな所に独りで居たためかその声の主が光っているように見えた。いや、ちよつと待て、本当に光っている気がするのは気の所為か？光っているというか、手が燃えていないか？私は思わず「ヒィ」と声をあげて驚いた。

「ああ、これか。私はこうゆう体質なんだ。まあ気にするな」

燃えている手をこちらに向けながら少女は言った。

気にするな。と言われると余計気になってしまふのだがそんなことより私は身の危険を感じずにはいられなかった。こちらとこの世に生を受けて四半世紀、生まれてこの方炎を出す人間なんぞ見たことも無いのだ。まず疑うべきは果たしてこいつは人間なのか、それとも人外の何かなのか。ということだが私の頭は続けざまに起きた摩訶不思議な体験を処理できるほど精密ではなかった。

「わ、私を食べる気か？」

恐ろしさのあまりつい言葉を発してしまった。

「食べる？どこぞの人喰い妖怪じゃあるまいし食べる訳ないだろう。私はこう見えて人間なんだ。カニバリズムなんて趣味じゃないしな。」

「どうやら私はまだ死なないうた。しかし相手が人間と名乗っているからといって油断はできない。私の今まで出会ってきた人間と呼

べる人種は決して炎を出したりはしなかった。まあ炎を出すやつとは今回初めての対面な訳だが。

「とりあえずこんな時間だし家に来るか？こんな所に独りで居たらそれこそ人喰い妖怪に食われちまうぞ？」

「喰われるのは御免だ。」

「よし、じゃあ決まりだな。ついてきな」

少女はそう言うとしたらと歩き出した。私はその後を慌てて追いかけた。

「そつえばここは一体どこなんだ？」

「ここは迷いの竹林だよ。なんだお前知らないでこんなとこにまで来たのか？」

「うむ、気がついたらここに居たのだ」

「？人里から来たんじゃないのか？」

「人里？ああ、街のことか。街に居たとこまでは覚えているのだがね……」

「街……？」

少女は首を傾げて考え事を始めた。それにしても街のことを人里と呼ぶとは、ここはもしかしてかなり田舎なのではなからうか。

「お前もしかして外人か？」

考え事が終わったのか彼女は私に質問してきた。

「外人？ いや、私はれっきとした日本人だが」

「あー違う違う。 えつとな、詳しく話すと長くなるんだが…」

彼女はそういつてこの世界のことを話し始めた。 要約するとここは幻想郷と呼ばれる場所らしく、私が今まで居た世界とは隔離された場所らしい。 幻想郷に入ってくるのは外の世界で忘れ去られたもの、簡単に説明すると昔のもの。 ということらしい。

「つまり私は外の世界の人間から忘れ去られたというのか。 なんて友達甲斐の無い友人たちだ！」

「いや、あと一つ幻想郷に入る手段はあるんだ。 おそらくお前もそつちだろう。 この幻想郷を創った妖怪の大賢者、八雲紫。 こいつがたまに外から人間を連れて来るんだ。 ほとんど無理やりにだけだな」

「どちらにしろ最悪じゃ。 何故私が連れ去られて来なければいけないのだ」

「悪いがそこまでは私にも分からんよ。 妖怪の考えることなんて興味もないしな…… っと着いたぞ。 ここが私の家だ」

そう言われ目を上げた先には江戸後期から明治初期を彷彿させるような一軒家が建っていた。 なんとというか趣きのある家だな。 と感じた。

第二章：小屋の中で

案内された部屋へ入ると、私はすぐに横になった。そういえば今日一日授業を受けて幻想郷へ来てここまで長い距離を歩いてと、身体を酷使してばかりであった。常日頃運動という行為に断固として目を瞑っていた結果がこの有様か、これからはもう少し運動という行為と向き合わねばいけないとも考えたが、やはりこれから目も瞑り続けることにした。これは私の名誉の為に言わせてもらうが、この先、生きていく中でこんなに運動することなんて滅多にないと思っただけであり、面倒くさいからとかでは、決して、ない。いわば統計学的に考えた結果なのだ。

私は横になりながら先程聞いた話を思い返していた。

彼女の名は【藤原妹紅】といい、いわゆる不老不死というやつなんだそう。不老不死、私にはなんとも甘美な響きに聞こえるが妹紅の話している時の表情からして、当人はあまり好んではないようだ。それならば譲って欲しいとも思ったが、ずっと独りで生きていくことは私には到底不可能だとも思った。私は自慢じゃないが寂しいと死んでしまうタイプの人間なのだ。

ここ幻想郷には多くの種類の妖怪が存在しているらしく、ざっと聞いただけでも吸血鬼、河童、幽霊、天狗、鬼、e t c . . . 想像しただけでもゾツとする話だ。というかこの世界は見境なく妖怪を取りこんでいるのか。和洋折衷入り混じりではないか。

そういえばつまり私は妹紅と出会う前ずっとライオンだらけの檻の中を目隠しで歩いてたような行為をしていたということになる。今考えただけでも背筋が凍る思いだ。

しかしちゃんと人間も居て、人里までであると聞いた。こんな妖怪だらけの場所に住んでいるなんて正気の沙汰とは思えなかったが、その辺は博麗の巫女という人がうまく調節しているとのことだった。私が居た世界の巫女はおみくじを売り捌くイメージしかなかったが、こちらの世界の巫女は妖怪退治が専門だと言う。私の中の美しい巫女のイメージが崩れ去った瞬間だった。私の頭の中には巫女のコスプレをしたゴリラのような人が映し出されていた。しかも私が元の世界に戻るためにはどうやらその博麗の巫女とやらに会わないといけないらしい。恐ろしい…

私はこれからのことに思いを馳せるのをやめた。何故だか考えたくなくなったのだ。いやほんと何故だろう。

そして私の意識は睡魔に誘われるまま途切れていった。

「おい、起きろ。出かけるぞ」

少女の声で私は目を覚ました。

「出かけるってどこへ？」

「昨日人里へ行くって話したじゃないか。もう忘れたのか」

「ああ、そういえば」

「全くお前は記憶力つてものが無いのか？」

「失礼なことを言うな君は。昨日は疲れていたただけだ」

「まあなんでもいいよ。さっさと朝飯済ましちまおうぜ」

「うむ」

我々二人は朝食をつつがなく済ませ、人里へと向かった。

第三章：魔法の森で 其ノ壱

耳を澄ますと木々が擦れる音が聞こえる。むしろそれしか聞こえない。ここは一体どこか。私はどこへ行けばいいのか。何故私は独りなのか。それを語るには少しだけ時間をかけなければならぬまい。私を独りという孤独地獄に陥れたあの野郎の残虐非道ぶりを伝えねばならないからだ。

私と妹紅は森の中をもくもくと歩いていた。

妹紅の家を出て私が昨日あれだけ迷っていた竹林をあっさりと抜け、竹林が終わったと思ったたら今度は普通の森が現れた。妹紅曰くこの森は魔法の森という名前の森らしい。いよいよ私もこの幻想郷に浸食され始めたらしい、魔法というワードにピクリとも動かなかった。流石私だ、これほど肝の据わった人間はそうそうおるまい。私は一人思案に耽りながら改めて自分の偉大さに気がついた。すごい！

「ん？」

前を見ると妹紅の足が止まっているのが見えた。

「どうした？」

「静かにっ！」

妹紅は厳しい口調で答えた。そこで私も辺りの様子が只ならぬことに気がついた。

「暗い…」

妹紅の家から人里まで妹紅は半日かかる、と言っていた。我々は朝方に家を出たのだから今はまだ昼なはず、そのはずなのだがこの暗さはどうか。まるで夕刻前のような暗さだ。私が暗さを認識するや辺りはより一層暗さを増した。まるで夜のような暗さだ。

「おい、これは一体…」

「ルーミア！居るんだろう！出てこい！」

私が言い終わらない内に妹紅は闇の中に向かって叫んだ。こいつは一体誰に向かって声をかけたのだろうか、と妹紅の頭を紳士らしく心配した後、妖怪の仕業と気付いた。そういえば闇を操る妖怪が居ると言っていたな。幻想郷風に言つと『闇を操る程度の能力』と言う。昨日習った。

しかし妹紅の呼びかけは闇の中へ吸い込まれたきり返って来ることにはなかった。私はやまびこが返って来ない登山客の気持ちを思い浮かべた。

「ちっ、おいお前。逃げるぞ、走れ」

「うむ」

私と妹紅は闇の中を駆け出した。どうもこの闇は子供の頃怖かった

ポットントイレの穴を彷彿させる。怖えなおい。

第三章：魔法の森で 其ノ貳

真つ暗で何も見えない世界の中を、私はひたすら走っていた。この全てを吸い込んでしまうような闇は私から視覚と聴覚を遠慮もせず奪っていった。自分がどこを走っているのかも、どのくらい走ったのかも全く分からないという状態だった。いつの間にか妹紅の姿も見えなくなっており、私はまた一人になってしまったのかとため息をつかずにはいらなかった。

彼女はおよそ人間とは思えない程の速さで駆け出し、すぐに姿を見失ってしまい足音すら聞こえない程遠くへ行ってしまったらしい。これでは私が人喰い妖怪に喰われてしまうのではないか。そんな考えが頭をよぎり、思わず私は生まれたての仔馬の様にプルプルと可愛く震えた。

「これは武者震いこれは武者震い」

自信を鼓舞する独り言を私はぶつぶつ呟き、心を落ち着かせようと必死になった。

その時、

「お前は食べても良い人間なのか？」

闇の中から声が聞こえた。まるで少女の様な声だった。

「駄目に決まっているだろうが」少し驚きながらも冷静に私は答えた。

「そーなのかー？」

「当たり前だ！食べても良い人間なんぞ居てたまるか！」

「でも私はお腹が空いたのかー？」

その声は「有無を言わず喰わせろ」と副音声が聞こえてきそうなほど必死な声だった。恐らくここ何日も食事を取っていないのだろう。しかし、しかしだ、だからと言って自分を食べさせてあげる程の自己犠牲愛を私は持ち合わせてはいない。どこぞのアンパンとは訳が違うのだ。

「お腹が空いていても喰わせられんものは喰わせられん。他を当たってくれ」

「嫌なのかー」

瞬間、私の左腕に激痛が走った。

「！？」

突然のことに私は声を上げること叶わなかった。喰われたのか？左手の感覚が嫌にはつきりしないのだが、これはそういうことなのか？ちよつと待て、おい…

少し離れた場所で私の元左腕だったであろうモノが噛み砕かれるバキバキという音が聞こえる。その音を聞いた瞬間、私は駆け出した。喰われてたまるか。今喰われたのが足ではなく腕だったのは不幸中の幸いというべきか、逃げるための足は未だ健在だ。一刻も早くこ

の場を離れなければ。

「逃げるのか？」

不意に私の耳元で声がした。

これが私が魔法の森で体験した出来事の一部始終である。

第四章：マヨヒガで 其ノ壱

正直な話私はあの闇の中で死を覚悟していた。どこから襲われるかも分からず、気がつくとも左腕がなくなっており、どれだけ走ってもすぐに追いつかれてしまう状況だったのだ。死を覚悟なと言う方が無理からぬ話だ。だから私が生きているということに対して一番驚いているのは、他ならぬ私自身だ。しかも喰われた筈の右手も綺麗に治っているではないか。これは一体どうしたことが。

周りの様子から察するに、時刻は深夜であると思われる。先ほどの妖怪が創り出した闇ほどの暗さは無いが、街灯も無い夜道は私を怖がらせるのには充分すぎる暗さである。妹紅は一体どこへ行ったのか。

暗闇の中どうすればいいのかわからず右往左往している私に、話しかけてくる声が聞こえた。

「探しましたよ」

その声は非常に落ちつき払った声であった。

「はあ、私をですか？」

「申し遅れました。わたくし八雲紫様に仕えている式神の八雲藍と申します。紫様のご命令により貴方をお迎えにあがりました」

「ちょっと待ってくれ、人違いだと思うのだが…」

「いえ、貴方で間違いございません。私は八雲の性を継ぐ者です。紫様のご命令された方を間違えることは決してありえないのです」

「はあ…」

私はこの時妹紅の言っていた【八雲紫】という人物の名を思い出した。なるほどこいつの主人だったのか。

「では私をその八雲紫という人物に会わせてくれるのか？」

「…いえ、残念ですが今は紫様とお会いになることはできません。詳しい話は落ち着いてからしましょう。マヨヒガまでご案内致します。」

私は八雲藍に導かれ、マヨヒガへ向かうことになった。

第四章：マヨヒガで 其ノ式

幻想郷の人里から遠く離れた廃村に「マヨヒガ」は存在する。そこから八雲紫の屋敷に行くのだが外の世界との境界上にあるらしくどのようなに行けるのかは謎である。とにかく私はマヨヒガに案内され、そこから八雲紫の屋敷に連れて行かれた。

ようやく私をこの幻想郷に連れてきた張本人に会えると思うと、不思議と私の拳は固くなる。一体全体どういつもりなのか問いただす必要がある。私は思わず武者震いをした。

「着きました」

八雲藍は落ち着き払った声で言った。

なるほど、いかにも妖怪が出そうな屋敷である。まあ出るも何も住んでいるのだから当たり前といえは当たり前なのだが、座敷わらしとかが三人くらい走り回っていても不思議ではないレベルだ。

「なかなか趣きありますな」

私は素直な感想を述べた。

「ありがとうございます。直に主人が帰って来ますので奥の客間でお持ち下さい。」

「うむ」

私は案内されるがまま客間へと向かった。しかしなんというか、人を呼び出しておいて待たせるなんてなかなか太い肝をお持ちのやつだな八雲紫って妖怪は。妹紅から聞いた話ではかなり長生きしてる妖怪みたいだが長く生きてると神経も図太くなるものなのか。

客間で待たされ始めてから半日程たったが、八雲紫が帰って来る気配が全くない。いやいやこれはどうだろう、おい、こんなに人を待たせるなんて礼儀知らずにも程があるんじゃないか？

客間に通されて一日たった。八雲藍が作ってくれる食事は和食で質素なものだった。が素材の味を上手く活かしており、とても美味しゅうございました。じゃなくて一日たった！人を一日待たせるとは一体どういうことだホント！マジで！

そうして私は約一週間、八雲紫の屋敷で平穩に暮らした。

おい

第五章：帰り道で

時間を少々遡る。

まだ「私」が幻想郷に連れて来られる、一ヶ月前・・・

その日私、鈴仙・優曇華院・イナバは師匠から頼まれたお薬を人里へを届けに行っていました。ついでに今日の夕飯のお買い物も済ませようなんて考えながら、浮足だって歩いておりました。久しぶりの外出だったのです。気分が浮かれてしまうのかもしれないのです。

人里へお薬を届け、買い物も済ませ後は永遠亭へと帰るだけでした。思っていたより時間がかかってしまったので、師匠に怒られちゃうかも。と考えながら急いで家路に着きました。

すると後ろから雨雲が近づいてくる気配がしてきました。黒雲が大きな獣のように夏空を走って、乾いた地面が沈んでいくようにかけると、ゾクリと背中に寒気が走ります。私はすぐに雨宿り出来そうな木の下に隠れました。

「参ったなあ、帰るの遅くなっちゃいそう・・・」

私がポツリと呟いた直後、それを合図としたかのように大雨が降って来ました。いえ、正確には雨ではなかったのですが…私は雨が好きではありません。どちらかと言うと積極的に嫌いです。しかし、

今となつては降つて来たものが雨だつたらどれだけ良かったでしょう。

その時降つて来たもの、それは大量の血でした。血の雨が降る、とか比喩したものじゃなく、本当に正真正銘の血の雨だったのです。

元軍人としてはお恥ずかしい限りでございますが、あまりにも大量の血生臭さと衝撃的な出来事に、私はそこで記憶が途切れてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8484y/>

東方神話大系

2011年11月29日19時58分発行